

淡路島方言「よる」の分化とその音韻変化

谷守正寛*

The Differentiation of Awajishima Dialect 'Yoru' and its Phonemic Change

TANIMORI Masahiro*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第8巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.3

平成24年3月30日発行 March 30, 2012

淡路島方言「よる」の分化とその音韻変化

谷守正寛*

The Differentiation of Awajishima Dialect ‘Yoru’ and its Phonemic Change

TANIMORI Masahiro*

キーワード：淡路島方言，よる，アスペクト，罵り，将然性

Key Words: Awajishima Dialect, Yoru, Aspect, Abuse, Expressiveness of Run-up

1. はじめに

本稿では、兵庫県南部に位置する淡路島の方言「よる」の機能の分化による音韻変化、及びそれに対応するアクセント変化について論ずる。淡路島方言は関西方言に含まれる。ここでいう「よる」とは、「まだごはん、食べよるで。」「雨が降りよるなあ。」といった進行中の事態を表す、方言特有の表現にみられる「よる」（以下適宜、ヨルとも記す。）である。稿者は淡路島（中南部：現在の南あわじ市）を言語形成地とする話者であるが、日本語の文法におけるアスペクトという観点で捉えた場合に、管見の及ぶ限り先行研究では未だ述べられていないと思われる、方言ならではの地域性のある音韻的变化を取り上げて分析し、まとめておきたいと考えた。

ここでは、少なくとも淡路島の方言における「よる」には、動作・事態の発生前の段階を表す場合と、動作・事態が発生後に進行中であることを表す場合とで、「よる」と動詞との接続の仕方に異なりが認められ、したがって、音韻的变化やアクセントの変化も同時に見出されるということを示す。アスペクト等に関わる動詞の種類もそうした違いの表れ方に影響はするだろうが、ここで述べたいのは、動詞の活用による種類（五段動詞か一段動詞等）、前接語尾の音の音韻的違いによって、「よる」のアスペクト的機能とモーダルな意味がどのように表れるか、ということである。結果としては、「よる」が接続する動詞の連用形とヨルの接続形式が変化する場合には、事態の進行段階のみならず将然段階も表しアクセントの表れ方も異なってくることで、連用形＋ヨルが変化しない場合には、事態の完了結果の継続を表し、さらに「罵り」の意味も加わることが分かった。なお、宇和島方言等に関する研究を参照しつつ、一部似た性質を実現する鳥取東部方言のヨルとも比較する。

2. 宇和島方言の「よる」

これまでの調査・研究によれば、「よる」は方言特有のものであり、標準語には見られない形式である。工藤(1998)の言う「西日本各地には標準語と異なるアスペクト体系をもつ方言が存在する」というところの代表的な言語形式がこの「よる」だろう。また、工藤(1983)は、「西日本を中心とする方言の多くに、シトル（シトー、シチョー）とシヨル（ショー、シユー）というアスペクトを表現する形式があり、それぞれ異なるアスペクトの意味を表すことはよく知られている。」と述べ、宇和島方言に見られるそれらの違いを例証、分析している。工藤(1995)においても同様のことが述べ

*鳥取大学国際交流センター

られている。そこでは、愛媛県宇和島において、

(1) ちょっと出掛けてくるけん、ごはん先に食べよってや。

(2) ちょっと出掛けてくるけん、ごはん先に食べとってや。

と言う場合、(1)は、<動作の進行性>を命令(依頼)しており、(2)では、帰って来た時には<動作が終了してしまっていること=限界達成後の段階>を命令している、としている。興味深いことに淡路島方言においても、このヨルとトルがそれぞれほぼ似通ったアスペクトの意味で捉えられる。

さらに工藤(1995)は、

(3) あ、みんな走りよる。 <終了前の進行段階にあると把握>

(4) あ、みんな走とる。 <開始後の段階にあると把握>

において、全ての動詞においてそうなるわけではないと断りつつも、同じ走りつつある動作場面を見た時、終了段階と関係づけるか、開始段階と関係づけるかによって、言い方が変わるのだという。そうならない例としては、例えば、「先生が窓を開けとる。」が、動作開始後の段階にあると捉えては言えないといった場合である。なお、本稿ではヨルに限って述べるので、上のようなトルとの対照については特にふれずに考察を進めることになる。ヨルの性質をより精密に理解するのに有用な場合に限って、必要に応じて、対照・比較するためにトルについてもふれる程度にとどめておく。

宇和島方言と淡路島方言においては、ヨルによる表現のとらえ方に若干の違いが存在する。次も工藤(1995)からの例文である。

(5) あ、猫が魚、食べよる。 <食べる動作の開始限界達成前の段階>

(6) さっき、町の上を、飛行機が飛びよった。 <終了限界達成前の段階=進行性>

(7) ちょうど飛行機が飛びよったんよ。子供ら熱心に見よった。 <開始限界達成前の段階>

それによれば、(5)は、猫が魚に徐々に近づいてきつつあるのを見ての発話であり、動作の開始限界をめぐっては開始限界達成前の将然段階にあるということ、他のアスペクト形式(スル、シトル)と対立すると述べている。(6)は進行性をとらえ、(7)は飛行機が滑走路に向かって移動しているのを見ての発話である、としている。淡路島方言においては、通常(5)は進行中の動作、つまり、終了限界達成前の段階であると解釈される点で異なり、(6)は進行中の動作という点で一致し、(7)では終了限界達成前の段階、つまり、進行中の動作と解釈する点で異なる。

詳細な細分類を載せることは省略するが、工藤(1995)は動詞の分類を次のように行っている。

表1: アスペクトと動詞分類

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・運動動詞 <+終了限界><+開始限界> <ul style="list-style-type: none"> └ 内的限界動詞 <+必然的終了限界> … あける、かう、きる、あく └ 非内的限界動詞 <-必然的終了限界> … うごかす、おす、あそぶ、とぶ ・状態性動詞 <-終了限界> <+開始限界> … こむ、かよう、おもう、いえる ・静態動詞 <-終了限界> <+開始限界> … おる、ある、そびえる |
|--|

その上で、本稿の考察に関わるものとしては、シヨル形式のアスペクトの意味について、次のようなことを指摘している。分かりやすく同書からの例文を若干改変して付けておく。なお、本稿では動詞分類の仕方と名称については特に論ずるつもりはなく、参照する先行研究の分類を援用する。

- (8) a. 運動動詞すべてが<終了限界達成前の段階性=進行性>を表す。例：走りよる。
 b. 非内的限界動詞と意志的な内的限界動詞は<開始限界達成前>の<将然段階>を捉える場合がある。例：犬の糞，踏みよるぜ。
 c. 過去形においてのみ，運動動詞すべてにおいて<非現実性>の意味を表す。
 例：もうちょっとで，ころびよった。
 d. 状態動詞と回復可能な内的限界動詞は<状態の継続性=状態維持の過程性>を表す場合がある。例：いま，教室に通いよるんよ。／いつまで，その服着よるの。

とりわけ，淡路島方言と比較する上で問題とする(8b)の「将然性」について，工藤(1995)では，次の例文を挙げ，(9)ではシヨルが意志的動作を捉えているために<意志的動作開始前の段階=将然段階>をも表し得て，(10)のように無意志的变化を表す場合はそうではない，としている。

(9) 先生が黒板の字を消しよる。

(10) 黒板の字が消えよる。

後述するが，この点についても淡路島方言では若干の相違が認められる。淡路島方言では，無意志的变化を表す場合であってもヨルが将然段階を表すことが可能である。

また，(8c)については工藤(1998)がより分かりやすく，シヨッタの場合，単に開始直前の過程にあったことを表しているのではなく，直前までいったが結局そうならなかったことまで含んで表しているということであると説明している。そして，ずっと以前の場合は「もうちょっとで」を伴って文が実現することを，次の例文で指摘している。

(11) この間，もうちょっとで，車にひかれて死によった。

さて，「もうちょっとで (=もう少しのところで)」という意味の淡路島方言の副詞である「おおかた」¹によって，その文の実現性をテストすることができる。つまり，「おおかた」と共起するかどうか，事態が実現の直前までいったが結局そうならなかったことを表しているかどうかの判断の決め手となる。そこで便宜上，これを「オーカタテスト」と呼ぶことにしよう。

なお，興味深いことに，宇和島方言についてはないが，工藤・清水(2003)によれば，岐阜県高山方言について，「<直前>の意味は，すべての運動動詞のシヨル (シヨゴザル) 形式が表すが，動詞によっては表しにくい場合もある。」，「シヨッタ (シヨゴザッタ)」形式は，<非現実>の意味も表す。」と指摘している。したがって，愛媛県宇和島と岐阜県高山という隔てた地域で共通点がみられることから，その間に位置する兵庫県淡路島の方言において，一部類似しつつも一部異なる用法が残存していても特に不思議なことではなからう。

3. 淡路島方言の「よる」

3.1. 将然性と罵り

そのほかの西日本各地域の方言について比較・検証することはここではしないが，前述の宇和島方言の研究において指摘された(8b)の「将然段階」を捉え得ることと，(8c)の「直前までいったが結局そうならなかった」ことを表す<非現実性>の用法について，宇和島方言と淡路島方言を比べつつ，吟味する。いずれの用法も「将然段階」にある，またはあったことを表す点では共通していると考え，本稿では便宜上，前者を「発話時将然段階」，後者を「過去時将然段階」と呼ぶことにしたい。また，その性質を呼ぶ時は「将然性」とする。

次は過去時将然段階を表す，淡路島方言では自然な文であり，「おおかた」と自然に共起し，したがって，オーカタテストにパスする。オーカタテストが有効なのは過去時将然段階を表すかどうか

の実現性をみる場合である。オーカタテストでは、前節で挙げた「おおかた」という淡路島方言で使われる副詞と共に起るかどうかが判断の決め手となる。

- (12) ふらついて、おおかた溝に嵌まあよったわ。
 (13) ぶつかって、おおかた、死んによったわ。
 (14) 落としてもうて、おおかた、壊しよったわ。
 (15) おおかた、穴に落ちちよったわ。

さて、上の例文で動詞に後接する「よる」の形式には、同じく過去のことを表しながらも、それぞれ次のような異なった形式がある。

- (16) あいつ、ふらついて、溝に嵌まりよったで。
 (17) あいつ、とうとう死によったなあ。
 (18) あいつ、勝手にさわって、壊しよったで。
 (19) あいつ、落とし穴に落ちよったで。

ここで(16)-(19)をオーカタテストにかけると、以下のように、実はパスしないのである。文頭のはそれが不自然な文であることを表す。

- (20) ?あいつ、ふらついて、おおかた、溝に嵌まりよったで。
 (21) ?あいつ、おおかた、死によったなあ。
 (22) ?あいつ、勝手にさわって、おおかた壊しよったで。
 (23) ?あいつ、おおかた落とし穴に落ちよったで。

このことから、(16)-(19)は淡路島方言では将然段階を表さないということになる。

宇和島方言では、工藤(1995)によれば、将然段階をとらえるアスペクトの意味がさらにすすむと、過去形(シヨッタ)においてのみ<非現実性>を表すようになる。一方、(12)-(23)からみて、淡路島方言では過去形に2つの異なる形式が存在し、その1つの形式は宇和島方言(あるいは高山方言)と同じく<非現実性>を表しつつも、他方の形式は、宇和島方言とは違った機能を持つことが予想されることになる。

つまり、上の(16)-(19)は、アスペクト的には将然段階ではなく、動作・事態の完了結果の継続を表している。実際には事実として、主体がそれぞれ、溝に嵌まり、死に、壊し、落ちた後で、発話者が述べた文である。発話者は、主体が溝に嵌まり、死に、壊し、あるいは落ちた事実を見て(あるいは知って)、述べているわけであるから、当然ながら、過去時將然段階を表すものではない。

さらに、自然に共起する「あいつ」という語からも窺えるように、発話者は述語動詞の主体である者に対して罵りの感情を表していることが分かる。

次の文は、したがって、淡路島方言では不自然に聞こえる。

- (24) ?ここに置いとった自転車、溝に嵌まりよった。
 (25) ?薬で風邪の菌、死によった。
 (26) ?うっかりしとって、わしが壊しよったんや。
 (27) ?洗濯物、落ちよったで。(落ちていた最中であつたという意味ではない。)

ただし、例えば(24)では、自転車に何らかの感情を抱いていて、その自転車に対して擬人的な表現を使って揶揄する意味で述べる場合であれば言えよう。

「よる」については辞典に次のような記述がある。

- ・動詞連用形につき、軽い罵りの気持ちを表わす。男性専用語。動詞連用形に付ける。その際、促拗音化することが多い。(前田 1964)

・第三者の動作を狎れ、または軽く侮っていう。(前田 1965)

上の記述と同じく、淡路島方言においても表しているのは罵りまたは侮りの気持ちである。だから(24)-(27)が不自然になるわけである。通常は、自転車、風邪の菌、わし(自分)、洗濯物に特別の感情を抱いて罵ることをしないからである。

聞き手に対して直接に罵って言う場合には、(28)のような表現がある。

(28) えらいこと、しよったな！(とんでもないことをしやがったな！)

ただし、「よる」は、淡路島方言では常に、侮りと言うほどの強い気持ちを表すものでもなく、軽く残念な気持ちだけを表すことも可能である。(28)は、困ったなあという意味合いで述べることもあり得る。文末のイントネーションによってその度合いが変わる。

さて、(28)を罵りの意味では(29)のようにはいにくい。

(29) えらいこと、しょったな！

(29)が言いやすいのは進行中の動作を表す場合である。つまり、動作を実現しているのを見て(あるいは知って)から、「とんでもないことをしていたねえ。」と述べていることになる。したがって、その場合は将然段階を表すものではない。

このように、淡路島方言では、ショーッタとシヨッタとでは、アスペクトのみならず、モーダルな意味においても複合的な異なりを見せることになる。なお、淡路島内のほかの地域すべてにおいてもこのような類似の現象が確認されるかどうかは、現時点では未確認である。

次に、上述のショーッタとシヨッタに限らず、ほかの動詞に接続する場合についてもどういった形式上の違いが現れるかを、(12)-(15)と(16)-(19)で使用した動詞を使って示す(表2)。アルファベットとひらがなを並記し、高いピッチの部分を示すためにアルファベットとかな共に上線を付けた。印刷の都合上、文字単位で上線を付けたが、「しょ」のような拗音の場合は1拍で発音するものの、「まゝ」のような場合には最初の拍「ま」に高いピッチが置かれ、「ゝ」で下がる。

表2：淡路島方言でのヨルの表れ方の例

嵌まあよった	<u>HAMAAYOTTA</u>	はまあよった
嵌まりよった	<u>HAMARIYOTTA</u>	はまりよった
死んによった	<u>SHIN'NYOTTA</u>	しんによった
死によった	<u>SHINIYOTTA</u>	しによった
壊っしょった	<u>KOWASSHOTTA</u>	こわっしょった
壊しよった	<u>KOWASHIYOTTA</u>	こわしよった
落ちよった	<u>OTCHOTTA(/OCHIYOTTA)</u>	おちよった(/おちよった)
落ちよった	<u>OCHIYOTTA</u>	おちよった

表2を見て分かるように、過去時将然段階を表す場合(同じ動詞の表現例のそれぞれ上段の形式)と、過去の完了結果の継続事態を罵りの感情を伴って表す場合(同下段の形式。以下便宜上、「過去の罵り」と呼ぶことにする。)とでは、音韻的にもアクセント核の位置についても微妙に異なることが分かる。

「よる」に前接する動詞の種類については本稿で特に扱わないが、表2の動詞は金田一(1976)の

いう「瞬間動詞」である。しかし、奥田(1978a, 1978b)などの考察がアスペクト研究の転換のきっかけとなり、工藤(2001)などでは、動詞の語彙の意味の中にある時間の長さではなく、<(運動の)主体>からみて<動作>であるか、<変化>であるかの違いが、アスペクト形式のバリエーションをもたらすものとして捉え、<時間的限界>の観点から捉えた、<内的開始限界>、<内的終了限界>といった概念が構築されている。本稿でもとりあえず、その方向で捉え、動詞の分類とその名称を援用し、動詞の分類についてそれ以上の考察の対象とはしないでおく。

3.2. 過去時將然段階と過去の罵り

ここでは、過去時將然段階を表す形式と過去の罵りを表す形式の違いを分析し、まとめる。

表2を見ると、過去時將然段階を表す場合と過去の罵りを表す場合とでは、前接する動詞の連用形が音韻的にもアクセントにおいても変化することが分かる。前者の場合、ヨルが接続すると元の連用形の形式が保持されずに、連用形の末尾が元の形式に比べて不明確で曖昧な形式になる。後者の場合は連用形の形式が完全に保持されている点で異なる。

そこで、活用による動詞の種類別、前接する末尾部分の音別(ア行～)にそれぞれみると、表3のようになった。

表3：活用による動詞種類別にみるヨルとの接続

五段動詞の場合：		
ア行	変化なし	例：会いよった。／会いよった。
カ行	促音化	例：書つきよった。／書きよった。
サ行	促音化	例：こわっしよった。／こわしよった。
タ行	促音化	例：落っちよった。／落ちよった。
ナ行	撥音化	例：死んによった。／死によった。
マ行	撥音化	例：飲んみよった。／飲みよった。
ラ行	ア音便化	例：嵌まあよった。／嵌まりよった。
ラ行	イ音便化	例：切いよった。／切りよった。
ラ行	ウ音便化	例：攣うよった。／攣りよった。
ラ行	エ音便化	例：減えよった。／減りよった。
ラ行	オ音便化	例：取およった。／取りよった。
一段動詞の場合：		
上一	変化なし	例：見よった。／見よった。
下一	変化なし	例：寝よった。／寝よった。
変格動詞の場合：		
サ行	拗音化	例：しよーった。／しよった。
カ行	拗音化	例：きよーった。／来よった。

表中、左端の「行」は前接部末尾の音が含まれる行を示す。その右に過去時將然段階を表す場合の変化についてのみ記述し(過去の罵りの場合は変化しないため)、さらにその右には接続形式の例

とアクセント（上線を付けて示す）を載せた。例は過去時将然段階を表す場合、過去の罵りを表す場合の順番で示し、「/」で区切った。なお前述したが、「きょ」のような拗音に高いアクセントが置かれる場合、表記の都合でアクセントを示す上線が2拍に分かれて見えるが、高いピッチを持つ1拍の拗音として発音するものである。

前田(1965)では、「よる」が付くと促拗音化することが多いとされた。表3を見ると、淡路島方言では、さらに加えて「死んによった」や「嵌まあよった」、「取およった」のような、撥音化、(ア～オ)音便化する例も見られることが分かる。また、アクセント核の位置は個別の動詞のアクセントタイプ（頭高型、平板化等）によって変動するために、表中の「嵌まる」と「取る」のように、アクセント核の位置の規則性について現時点ではふれないが、過去の罵りの場合には、常に、シヨッタのヨの拍にアクセント核が置かれる。なお、淡路島内においても地域によっては若干の表現の違いがあり得るが、ここで挙げる形式は稿者の語感によることを断っておく。

3.3. 発話時将然段階と「現在の罵り」

現在の発話時における事態に対しても、淡路島方言において、将然段階が表されるかどうか、また、罵りの意味が表されるかどうかによる形式上の違いが顕現するかどうかを見る。「過去の罵り」に対し、ここでは「現在の罵り」と呼ぶことにする。

- (30) a. (車が嵌まりかけているのを見て)
見てみい、車、嵌まあよるで。(将然段階)
- b. (溝に嵌まった状態を見て)
見てみい。あいつ、溝に嵌まりよるで。(罵り)
- (31) a. (パトカーに停車させられるところを見て)
あつ、警察に捕まあよる。(将然段階)
- b. (警官に事情聴取されるのを見て)
あ～あ、また警察に捕まりよる。(罵り)
- (32) a. (今から何かをしかけているのを見て)
なにしよーんの？(将然段階)
- b. (とんでもないことをしたところを見て)
なにしよるの！（罵り）
- (33) a. (いまから来ようとしているのを知って)
また、きよーるで。(将然段階)
- b. (来て欲しくない人が来たところを見て)
また、来よる。(罵り)
- (34) a. (先に横になりながら)
先に寝よおわ。(将然段階)
- b. (すでに眠っている者を見て)
ちゃっかり、もう先に寝よるわ。(罵り)

なお、上の将然段階を表す(30a)～(34a)の各a文は、進行中の意味にもなり得る。

このようにみると、淡路島方言では、発話時現在におけるシヨルにおいても罵りの意味を表し得ることが分かる。そして、3.2で見たように、ここでも発話時将然段階を表す場合と接続形式に同様の違いが認められる。

例えば、(34)でも、表3における場合と同様にアクセントには違いが表れる。つまり、罵りの場合には常に、ヨルのヨにアクセント核を置いてヨルの顕現を明確に実現させるのである。(34a)では「寝」に高いピッチが置かれ、「よ」で下がることになる。なお(34a)を「寝よるわ。」と言うことも可能なようであるが、反対に「寝よおわ。」が現在の罵りを表すことはない。

先に、淡路島方言では発話時（現在）に無意志的变化を表す場合であっても、ヨルが将然段階を表し得ることを述べた。その例をアクセントも示して挙げる。

(35) おい、かばん、落ちよんで。

(36) あっ、ボタン取れよんで。

もっとも、このような形式では進行中の状態を表すことが多いが、(35)の「落ちる」と(36)の「取れる」は無意志变化を表す動詞であり、かばんもボタンも落ちたり取れたりしていく途中の段階にあるのではなく、ここでは発話時将然段階を表している。

ただし、落ちかけていることと取れかけているという将然段階にある事態が、認識的には、落ちることや取れることという過程の中にすでに入っているという進行中の意味の解釈も不可能ではないかもしれない。動詞の持つ意味によってはそのような捉え方ができようが、本稿では動詞の種類との関係での分析までは行わず、今後の課題としたい。

3.4. 鳥取東部方言との比較

鳥取東部においてもヨルとトルが使われるので、淡路島方言とある程度似た用法を持つことが予想される。そこで、隣接する鳥取東部の話者から聞き取りを行うことにした。そして淡路島方言と比較し、どのような程度まで類似点と相違点があるのかをみる。

「スピードつい出し過ぎて、警察に捕まるところだった。」と「もうちょっとで溝に嵌まるところだった。」という過去時将然段階を表す文の場合、鳥取東部ではそれぞれ、次のようになる。

(37) 捕まりかけたわいな。

(38) 嵌まりかけたわいな。

これを同じ意味合いでそれぞれ「捕まりよった／捕まりよーった。」「嵌まりかけた／嵌まりよーった。」などとは言わない。そして、将然段階を表す場合には、淡路島方言とは異なり、「よる」ではなく「かける」（あるいは「ところだ」）を使用する。もっとも淡路島でも「かける」と「ところだ」（「とこだ」になる）は使用される。

さて、鳥取東部方言話者に確認すると、興味深いことが分かった。

(39) a. 捕まりよーった。

b. 捕まりよった。

(40) a. 嵌まりよーった。

b. 嵌まりよった。

(39a) (40a)の場合は進行中の意味になり、それぞれ「捕まっていく途中だった。」「嵌まっていく途中だった。」と解釈される。一方、(39b) (40b)では、「(あいつ、) 捕まりやがった。」「(あいつ、) 嵌まりやがった。」と、からかう感じで言っている、という。そして、その場合は「り」か「よ」を高く発音する2つのパターンがあるのである。そこで、さらに確認すると、「り」を高く言う場合の方が「よ」を高く言う場合よりも若干、からかいの度合いが強いようである。

これを時間軸に沿って表示すると表4のようになる。動詞「嵌まる」を使って示す(表4)。すなわち、表4において、時間の流れ1の段階の表現は淡路島方言の「嵌まよった」に相当するが、

鳥取東部ではヨルを使用せずに「～かける」を使っていることが分かる。この点で、淡路島方言ではヨルの音韻的に変化した固有の形（「嵌まあよった」）が、表4の1段階のアスペクトをも表し得ることが大きな特徴であると言えよう。なお淡路島でも「嵌まりかけた」は言い得る。

次の時間の流れ2の段階では、淡路島方言において「嵌まあよった」のようにヨルを使って表すことができるので、音韻的变化は異なるものの、ヨルのアスペクト用法は鳥取東部方言と部分的に重なる。さらに3の段階では、淡路島方言と同じく「嵌まりよった」という形式をとるのである。トルはここでは扱わないが「嵌まっとった」は両方言に共通する。

表4：鳥取東部のヨル（トル）の表す事態の時間的位置関係

時間の流れ→		
1 まだ中に入っていない段階	→ 2 中に入る途中段階	→ 3 すでに中に入った状態
嵌まりかけた	嵌まりよーった	嵌まりよった／嵌まっとった

さて、さらに興味深いのは、鳥取東部でも3の段階におけるヨルが、からかう感じ、つまり罵りの意味を表すことである。罵りを本来表すとされるヨルを際立たせて、ヨに高いピッチを置くか、前接動詞の連用形を際立たせてりに高いピッチを置くことも注目できる。淡路島では鳥取東部とは逆に罵りの意味が若干中和されるが、「嵌まりよった」の「り」にもアクセント核を置くことが可能である。いずれにしても、ヨルのモーダルな意味を表す機能については、両方言が似た性質を持っていることになる。

罵りの意味を表す「嵌りよった」の両地域のアクセントは(41b)のようになる。谷守(2011)においては、鳥取東部方言のアクセント規則とは「ピッチの高い複数拍の最後の拍のみを高く発音する」ものであった。ヨルが東京語でなければ、実際に使用される以上、京阪地域からのヨルであろうし、そのアクセント核が引き継がれることになる。したがって、谷守(2011)の言う規則に従えば、(41a)のピッチの高い複数拍の最後の拍である「よ」または「り」のみを高く発音することが予想されるが、実際に鳥取東部式のアクセントでそれを実現しているという点で、規則と事実が整合する。

- (41) a. はまりよった。／はまりよった。(淡路島)
- b. はまりよった。／はまりよった。(鳥取東部)

このように、鳥取東部では、「はまり」という連用形またはヨルを際立たせるために、それぞれのうちの1つの拍にアクセント核を置いて発音することにより、連用形とヨルが融合した「嵌まりよーった」という形式とは弁別しつつ、ヨルの本来持つ「罵り」(からかい)というモーダルな意味の表出を達成するという点については、淡路島方言と共通しているわけである。このことについては、次節でさらに考察を深める。

表5：淡路島方言ヨルの表す事態の時間的位置関係

時間の流れ→		
1 まだ中に入っていない段階	→ 2 中に入る途中段階	→ 3 すでに中に入った状態
嵌まあよった	嵌まあよった	嵌まりよった／嵌まりよった
ー罵り	ー罵り	+罵り / (△罵り)

鳥取東部方言と比較するために、淡路島方言ヨルの表す事態のアスペクト的位置づけを時間軸上に示した(表5)。動詞は「嵌まる」を使いアクセントを上線で示す。モーダルな意味の有無は±で示し、△は意味が弱いことを示す。

増井(2007)は、近世期以降の上方・京阪では、ヨルは基本的には軽卑語として用いられてきたとみなし、京阪地区のヨルについての、中立的アスペクトが先でそれが衰退して待遇表現になったという説明は修正する必要がある、としている。その上で、近世上方語および京阪(を中心とする)方言のヨルと西日本方言におけるヨルを別物と捉えて、前者が「判断」を構成するもの、後者はアスペクトを構成するものと分けて捉える考え方を取る必要がある、とも述べている。

さて、両者が別物であるかどうかを稿者は現時点では検討し得ないが、本稿で扱うヨルの分化と、増井(2007)の言う別物という捉え方とは、いずれもヨルには2つのものがあるという意味においては符合することになるのは興味深い。いずれにせよ、鳥取と京阪という地域の間に位置する淡路島において、ヨルが、京阪地域でみられる前田(1964)のいう罵りの意味と、西日本方言でみられるアスペクト表現としての性質の両方を、地理的位置づけに呼応するかのように、同時に併せ持つことは注目できよう。

3.5. ヨッタ／ヨルの前接部分についての考察

淡路島方言では、過去時將然段階を表すシヨッタに促音化、撥音化、音便化などが起こるが、その原因について少しく考察したい。

例えば、「嵌まあよった」における「よった」に前接する「嵌まあ」では、本来の連用形「嵌まり」と比べると、連用形ならではの性格を明確に示す「り」の部分が欠落していることになる。山口・秋本(2001)によると「連用形に接続する助動詞・助詞は、平安時代末期に使われ出した『たし』を除いて、いずれも実現した内容にかかわる語である。その接続から、連用形は、それらの語と矛盾しない概念を表したと捉えることができる。」とされる。

つまり、連用形はすでに実現した内容を表す性格を持つにもかかわらず、ヨルが連用形に接続して將然段階を表す場合は、その動詞の表す事態は未だ実現されていないために、連用形本来の表す概念とは明らかに矛盾することになる。

そこで、連用形本来の表す概念と矛盾する概念を表すために、淡路島方言では、連用形の明確な形式が崩れ、促音化、撥音化、あるいは音便化をもたらしたのではないかと仮定できる。連用形が変形し、崩れると、連用形本来の表す概念も弱まり、將然性の実現の余地が生まれるわけである。

「嵌まあ」は「嵌まる」の未然形「嵌まら」に幾分その形式を近付けつつも、連用形に接続してきたヨルを未然形に接続させるわけにもいかず、曖昧な形式に変容させた連用形に接続させた格好になっているのではなかろうかと考えれば都合よく説明でき、合理的であろう。

しかも、ヨルの表す完了結果の継続の意味と同時に、罵りの意味をも消去するかのように、ヨルという形式を際立たせるプロミネンスも弱めさせている。つまり、ヨルのヨにあるはずのアクセント核を、「嵌まあよった」の「ま」のような前接部に移動させている。そのことによって、ヨルが本来持つ罵りの意味を弱めさせ、將然性という性質を実現する余地も持ち込んでいると仮定できる。

ただし、表3における「切いよった」と「切りよった」、「取およった」と「取りよった」のように、動詞のタイプによっては、アクセント核の位置が移動しない場合もあり得る。精査はしないが、淡路島方言では第1拍が低く平板型になる動詞(「書く」、「切る」、「取る」等)にそのようになる傾向が見られる。

連用形について、山口・秋本(2001)はさらに、「平安時代末期に希望の意味の『たし』が使われ出した。連用形接続であり、『たし』の希望する内容は本来未実現事態であるから、未然形であるはずである。それが連用形接続で使われたということは、連用形がそれまでの未然形に相当する形になったことで、現代語につながる活用形無意味化の始まりといえる。」と述べている。このような、未然形に接続すべき語が連用形に接続せざるをえなかった例があったことは興味深い。

ヨルの場合は、当初より連用形接続であったものが、その表す内容の将然性によって幾分未然形に接続させたいところが、前接する動詞の活用形を変更することまでにはさすがに至らず、結果的に形式上崩れさせる力が働いたとも考えられよう。

また、山口・秋本(2001)は、未然形の項目で、「未然形の表す内容はその時点までに実現しておらず、その意味で『未だ然らざる形』の名称がふさわしい。」と述べている。これはまさしく将然性にやや近い性質でもある。しかし、だからといって、上述のように、ヨルが未然形に接続し直すといった段階にまで至ることは不可能である。あるいは、なぜならば、将然性とは、「直前までいったが結局そうならなかった」ことを表す点で、なお以前、未然形の表す概念とも異なる。「直前までいった」ということは、むしろ連用形の性質も途中段階までは併せ持つからである。

将然性とは、動作が起こって次の動作につなげる(連用する)という意味ではない点で未然形の意味に近いとも言えようが、結果的には、次の事態へと引き続いて起こることを将然的に表した点では、連用形の意味をすでに部分的に含んでいるのである。つまり、前出の「落っちょんで。」のように、まだ空間的には落下していないが、落下というプロセスに観念上は入っているとも解釈できるからである。次の事態へと‘連用’しようとする将然段階に入っているわけである。

このように、連用形本来の姿を変容させた形式を援用することによって、連用形の表す概念とは相容れにくい「将然性」という性質を、都合良く表しているのではないかと考えられる。したがって、連用形の形式を完全に残したままヨルを接続した場合には、将然性はまったく表されず、代わりに、動詞の表す事態の実現が済み、だからこそ、その事態の事実に対して湧き起こる話者の罵りが、その次に表れ出てくると考えれば、やはり都合よく説明できよう。

「嵌まり」というはっきりとした連用形で発話した時点では、主体がすでに嵌まったことが連用形を持つ特性によって述べられてしまい、その次の助動詞ヨルによっては、それが本来持つ話者のモーダルな意味である罵りの意味の表出へと‘連用’されるのである。

これは、3.4でもみたように、近隣の鳥取東部の方言においても、アクセントは異なるものの、罵りの意味の表れ方としては共通していることが分かった。さらに、淡路島方言のヨルは将然性を表すに留まる段階においては音韻的に変化した特有の形式によって、「罵り」の意味の表出を実現させないものである。

4. まとめ

本稿での考察によって、淡路島方言のヨルについて、次のことが分かった。

- ・西日本方言でみられる将然性という性質と罵りの意味を併せ持つが、将然性は、前接動詞+ヨルの音韻的变化によって実現される。
- ・その分化の仕方には、前接動詞の連用形が促音化、撥音化、拗音化、音便化するもの、変化しないもの等がある。(詳しくは表3を参照。)
- ・将然性と罵りの意味の表出に対応して、アクセント核が移動する場合がある。罵りを表す場合は常にヨルのヨまたは連用形末尾にアクセント核が置かれる。(鳥取東部でも鳥取東部方言アクセン

トの規則に従ってヨルのヨまたは連用形末尾の1拍が高くなる。ただし、罵りを表さない場合でも将然性はない。）

- ・現在の発話時将然段階についても表し得る。

淡路島方言のヨルのこうした分化が截然としたものとして存在するとは言えない島内地域もあり得るかどうかについては、今後の課題である。

(注)

¹ 『新辞林』(三省堂)によれば、「おおかた【大方】」の項目には、「(副) ほとんど全部。だいたい。あらかた。」とあり、例文として「骨組みは一できた」という文が挙げられているが、言うまでもなく、これは将然段階を表すものではない。「できる」を内的限界動詞と捉えれば、「おおかた」は進行中の事態を表している。なお、文献ではないが、ネット上の『淡路弁.net』(2012年1月現在)の「おおかた」の項目のところには、
おおかた～しよった…「おおかた～しよった(すっこやった)」で、「もう少しで～するところだった」という意味になる。例文：おおかた車ぶつけるとこやったわ。(例文訳：すんでのところを車ぶつけるところだったよ。)

という記述がある。この例文はあきらかに将然段階を表した文である。ただし、西日本の淡路島以外のほかの地域にどれほど同じ用法の「おおかた」があるかについては、現時点では管見の及ぶところではない。

参考文献

- 奥田靖男(1978a)「アスペクトの研究をめぐって(上)」『教育国語』53号。教育科学研究会国語部会。表書房。
 奥田靖男(1978b)「アスペクトの研究をめぐって(下)」『教育国語』54号。教育科学研究会国語部会。表書房。
 金田一春彦(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。(初出『言語研究』15。1950)
 工藤真由美(1983)「宇和島方言のアスペクト」『国文学 解釈と鑑賞』第48巻第6号。至文堂。
 工藤真由美(1995)「愛媛県宇和島方言のアスペクト体系」『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房。
 工藤真由美(1998)「西日本方言と一般アスペクト論」『月刊言語』第27巻第7号。大修館書店。
 工藤真由美(2001)「アスペクト体系の生成と進化—西日本諸方言を中心に—」『ことばの科学』10号。むぎ書房。
 工藤真由美・清水由美(2003)「アスペクトと敬語—岐阜県高山方言の場合—」『阪大日本語研究』15号。
 前田勇(1964)『近世上方語辞典』東京堂出版。
 前田勇(1965)『上方語源辞典』東京堂出版。
 増井典夫(2007)「近代語にみられる『トル』と『ヨル』について」『愛知淑徳大学国語国文』30号。
 谷守正寛(2011)「鳥取東部方言アクセントの規則」『地域学論集』第8巻第2号。鳥取大学地域学部。
 山口明徳・秋本守英(2001)『日本語文法大辞典』明治書院。

(2012年2月3日受付, 2012年2月10日受理)